



ローマ教皇（法王）



ローマ教皇（法王）



謁見（藤原市長）



謁見（藤原市長）



謁見後の市内代表と



謁見後の記念写真

カステル・ガンドルフォ (Castel Gandolfo) に向かう。ローマから約 25 キロ南下したところにあり、人口 8,500 人のイタリア共和国ラツィオ州ローマ県のコムーネ（自治体）のひとつである。バスの中で結城氏の著書「ローマを見た」を読むと、1585 年 3 月 23 日にグレゴリオ 13 世に謁見。発熱した中浦ジュリアンは医師に止められたが「パパさまにお目通りかなえば死んでも本望です。」と参加する。教皇はジュリアンを抱擁し、病気を治すことに専念するように忠告した。他の 3 人は袴をまとい、馬にまたがってヴァチカンへ向かう。先頭には騎兵隊、スイスの衛兵、枢機卿、ローマ駐在各国大使、真赤な服装の教皇庁職員、2 人の大司教に挟まれてヴァチカンに向かう。教皇は 3 人を涙ながら迎えた。3 人は土下座して十字を切り、教皇の足に接吻した。4 月 24 日には、次の教皇に選ばれたシクスト 5 世に謁見しており、2 代の教皇に謁見している。5 月 1 日の戴冠式に参列するために馬に乗った 4 少年の壁画が、前にも触れましたがヴァチカンにあります。2 代といえば、今回の団長である藤原市長もヨハネパウロ 2 世とベネディクト 16 世に謁見している。有家町長時代を加え 2 代のローマ教皇（法王）に謁見されるとは、強運の持ち主であり、珍しいと言えます。その市長は、バスの中でアンナさんよりイタリア語の発音のお勉強中です。「もう少しまるやかに」と、何度も何度もバスの中には市長の爽やかな発音が流れていました。

専用駐車場から歩いて行くと、子供達の袴（かみしも）は目立ち、各国の人たちもいろいろと聞いてくる。坂道を上ってゆくと、左にアルバーノ湖が見える。周囲 10 km で水深は 170 m もあるカルデラ湖である。広場の入り口で、法王庁の警備員がバックの中をチェックする。広場のまん中には噴水がある。ここは昔から教皇が避暑地として訪れている。7 月から 8 月の間は毎年教皇が約 1 ヶ月ほど滞在される別荘で、城内にはチーボ荘、バルベリーニ荘とともに、55 ヘクタールに広がる別荘や農園があります。ここの作物は毎朝、教皇宮殿に野菜・果物・牛乳・鶏肉等の食材が届けられ、教皇をはじめとした教皇庁職員に供されます。余剰品の牛乳などは、ヴァチカン内のマーケットや近隣の商店で取り扱うとのこと。近くに 212～217 年にかけて建立された巨大浴場（カラカラ浴場）があり、敷地内には図書館や散歩道、アスレチック施設などがあり、当時は社交場としてにぎわっていたらしいです。

ローマ教皇の謁見が行われる中庭にむかう。教皇を直に会うことが出来る人数は限られている。入れなかった人は宮殿の正面のモニターで謁見の様子を見守ることになる。10時半のからの謁見ですが、中庭への入場が始まったのが9時半ごろで、中庭に入るため再びバックを開けて荷物検査を受けた。ペットボトルのフタを渡すのは水の入ったボトルを教皇に投げつけるのを防ぐためだそうです。門にはに警護に当たるミケランジェロがデザインした華麗な服装のスイス人衛兵がここにも立っています。

ゆっくり進んでゆくと、中庭にもモニターがあり、教皇の様子をアップで見ることができるようになっている。間近に法王の椅子が置いてあり、教皇の前にはやっとひとりが立てる範囲しかない。隣の若い金髪の女性がカメラの調子が悪いのか、カメラを見せて「日本人か」、また「カメラが直せないか」と聞くので、ソニーだったので日本人なら直せると思ったのだろうか。日本人と聞かれて安堵した。これは海外はひとりですが多いので、日本



副市長疲れました

人以外の国名で聞かれる。礼服だと日本人かと聞かれるので、人間外見も必要だなと思います。

しばらくして聖職者の方が来て謁見に参加する団体の名前を読み上げました。イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語と言語が変わる度に読み上げる係の人も変わります。我々は英語のくくりになっており、「ミナシマバラ ジャパン」の紹介があると大きな歓声があがりました。次に教皇が登場され、「司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）創立者のグスマンの聖ドミニクスの祈りの生活について」イタリア語で話されました。（2012年8月8日、カステル・ガンドルフィ公邸前のピアッツァ・デッラ・リベルタ（自由広場）にて）。その後、教皇はフランス語、英語、ドイツ語、スペイン語で話されました。いちばん前列には結婚式を挙げてきたばかりの二人が寄り添って立っています。



ガンドルフォ城の前広場

最後に、教皇と直接に言葉を交わす機会が設けられ、使節団を代表して藤原団長が壇上にあがって、勉強された流暢なイタリア語でなく英語で、「日本の長崎県から来ました。」と語りかけると、法王は笑顔で応えられたと、その場の模様をはっきり言われました。謁見後に島原手延そうめんも献上され、市長が宮殿の方に歩いて行くので、係員が素早く市長の腕を優しく持って出口まで誘導されているのをビデオに収めました。島原手延そうめんの返礼かどうか不明ですが、特別謁見記念品をいただいてこられました。大変貴重なものです。



袴姿の8少年たち

謁見後に、共同通信社ローマ支局のダヴィデ・コメット氏は、感想を取材している。森永由衣さん（14）は「法王に会えたのがこの旅の一番の貴重な経験で一生の思い出になります。」と感激した様子で、また横浜市の森田洋史君（15）は「法王の包み込むような優しさにや霽囲気に圧倒され、人生の良き思い出になりました。」と話していた。このような経験は人生に二度とない名誉かも知れません。



アルバーノ湖

日本からの袴姿は、バスを降りるところから謁見後の帰る道すがらまで、各国の人たちの興味を引いた。受け取ったカメラは全部日本製で、何度も私はシャッターを押していました。



各国の参列者と

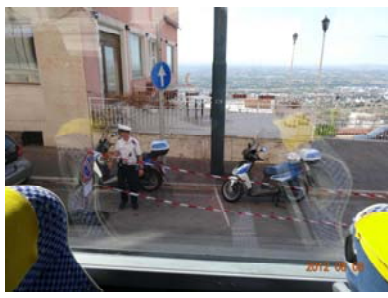
キエーティは、ローマより200 Km で3時間ほどかかる。イタリア共和国アブルッツォ州にある人口約5万5千人の都市で、キエーティ県の県都で、標高400mの所のペスカラ川右岸、マイエツラ山とグランサッソ山手前の眺めのよいところにあります。イエズス会宣教師・ヴァリニャーノさんの出身地である。ワイン畑に覆われた、なだらかな丘が特徴的なアブルッツォ州のワイン生産のほとんどが、ここキエーティで栽培されており、イタリア国内2位のワイン生産高を誇ります。



先導する市警察の白バイ

高速を降りると、市警の白バイが待機して我々を誘導する。ローマ法王に謁見や白バイ誘導など滅多にない体験に、一番興奮しているのは添乗員とガイドだった。こうゆう経験は普段の生活では訪れないだろう。

ホテルに着くと警官がバスの廻りにいる。バスを降りると大勢の人たちがホテルの玄関の周りを囲んで我々に手を振ってくれる。平成の少年たちのホストファミリーと市役所の方々の歓迎である。ホテルに荷物を置き、歩いて市の中心部に向かうと、広場にてフォルテ大司教に迎えられ歓迎を受けた。話の途中でアイスが配られたが、町の至る所でアイスが目につく。次に礼拝堂に案内されて、お祈りと大司教を囲んでの記念写真を撮り、大



ホテルを警護する市警察



大勢の方の出迎え



フォルテ大司教



大司教と記念写真



歓迎式典



歓迎レセプション

司教と別れて市役所に向かった。

歓迎の式典では、両市長もエヴォラ市と同様の思いがあり、お互いに興味を示し、歴史だけではなく経済的な交流を話された。また、南島原市が9月に行う記念式典への出席も重ねて要請され、両市のプレゼントの交換がなされたあと記念写真を撮った。絆のハッピーは評判が良かったが、ポルトガル人とイタリア人なので、少し小さくてチョコキ（ベスト）のような感じだった。式典には多くの取材があり、出席者も大勢参加されているのに驚きました。

歓迎レセプションまで時間があるので、ディ・プリミオ市長自ら市長室、市議会場、商工課などを案内していただいた。市内の建物を入ったり出たりしていると、先回りしたように至る所に白髪のおじさんが立っています。

歓迎レセプションは、ローマ時代の遺跡のまん中にテーブルがつけられ、悠久の光の中での食事会である。ホストファミリー、ヴァリニャーノ一族皆様、彫刻家、市の関係者など多くの方にご出席いただきました。少年たちもホストファミリーにすっかり溶け込み、楽しいひとときを過ごしていました。途中、美人の市長夫人と幼い娘さんが来られ挨拶に回られます。

会食の途中で、ディ・プリミオ市長と藤原市長が仲良く、こっそり歩いていくので、後から着いていくと自衛軍の音楽祭に参加され、手を胸に当て自衛軍の幹部2名とともに観謁式に望んでおられました。しばらく音楽を楽しんだ後、会食会場に戻り、子どもたちを呼び、扇子（イタリア語で詳細に説明した文を添付）とカップめんと岩おこしを、何かの時の話の種にしなさいと言って渡した。次の日、現地の子どもが持っているのを指さして大人の方も日の丸の扇子が欲しいらしく、1本残っていたのを渡した。何人もの方が欲しそうにされていたのが印象的だった。何度海外に出て経験しても何が喜ばれるの検討がつかない。爽やかな夜風を受けて石畳を歩いて行くと、クラシックの音楽会が始まろうとしていました。

音楽会は、キエーティ財団のディ・ニシオ理事長と並び楽しいひとときであった。終わりの方では衣装を変えて、日本人テノール歌手が雪駄を履き甚兵衛姿で熱唱される。右側を見ると、日本人らしい女性が二人鑑賞されていたので挨拶して名刺をいただいた。秋篠音楽堂ディレクターの吉川さんと、イタリア近鉄の花井さんと、皆さんが来られると聞いたので駆けつけたとおしゃいました。その後は、子どもたちは、ホームステイ先に行くので別れた。音楽会の帰りに市長夫妻と一緒にになった。遅いので眠りについた幼い子供さんは乳母車の中。「あなた押しなさい」と、奥さんが乳母車を渡された。見ていた私に、にっこりされ、マッルチーノ通りを二人並んで歩いて行かれた。市長は話されるとき、美人の奥さんが自慢なのか、結婚指輪をくるくる回しながら話されるのが印象的でした。

本日宿泊するホテルは、昔の5つ星と思われ、高台にあるので、各部屋より外に出られ、部屋からの景色が最高である。昼間は1階でアイスクリーム中心に販売しており、ピザなどもある。夜はお酒もあるので飲み屋となるのだろう。地下であるが絶壁に立っている所以全体が明るい。観葉植物などが多く並べられレストランに成っている。

ホテルに戻りフロントで部屋番号を英語で伝えたが通じない。メモと鉛筆を持ってきて、部屋の番号を書けと言っているようで、再度英語で番号を言ったら、棚から全部のカギを持ってきて並べるので、自分で選べとの



楽団

ことだろう。ひとつを取って部屋に向かう。部屋からの夜景は本当にすばらしかった。

次の朝、ホテルを出て左に出て坂を上ってゆくと、左にかまぼこ型のドームみたいな建物がある。覗くとエスカレーターが上下動いており1台が長く3連あり、下の町と繋いでいる。もう少し歩いてゆくとバスの発着所があり通勤者が待っている。右手に教会があり部屋からも見えていたロマネスク様式のサン・ジュスティエーノ大聖堂で、威厳があり鐘が見える。大聖堂をくぐり抜けて歩いてゆくと、古い町並みが裏通りに続いているので、珍しい建物を写真におさめた。ホテルに帰ると地下のレストランで朝の爽やかな風に包まれて皆さんはお食事中でした。



観謁式

午前中は、市長夫婦と市議会議員の案内でワイン工場を視察します。漫画家のサラさんと環境課の女性職員も同乗した。財団のワイン工場で、娘さんから説明を受けた。国県市からの助成金や補助金は一切なく資本金は12億円と聞いた。ワインツウの高田副市長の強い推薦なので、赤を1本、バックにいれ帰国した。



現地の学生との交流

バスは市内に戻り、サン・ジュスティエーノ大聖堂で子どもたちと落ち合った。その横に昨日の至る所に出発するおじさんが立っていた。そのおじさんは、自ら大聖堂内を案内してくれます。大聖堂の中にも、おじさんが制作した銅像があり、外には4少年を派遣したアレッサンドロ・ヴァリニャーノさんの胸像がある。これらを制作され、多くの勲章をいただいているお偉い方とわかって、急遽握手して一緒に胸像の前で写真におさまった。



音楽会会場にて

旧市街まで歩いてゆくと、人口のわりには人通りが多く、オープンテラスが並ぶエレガンスな町並みです。マッルチーノ通りやデル・チェントロ通りには、有名なマッルチーノ劇場、バルベッラ美術館、教会が町並みに溶け込んでいます。ひとつひとつを見て回りました。特に劇場は、真赤の座席が小さいけれどボックス席など大劇場並の設備を備えています。舞台の下には音楽隊がはいり演奏できるように成っています。



日本人テノール歌手

ディ・ニシオ理事長は、会食前に我々を呼んで、「南島原市との歴史的なかわりによって、ヴァリニャーノ神父の胸像が南島原市に行くことを嬉しく思います。そのきっかけはマリッサ・ディ・ルツ教授によるものですが、これを機会に有効の場を広げてゆきたい」と話されました。それに対し藤原市長は、「交流もない貴市より貴重な神父の胸像をいただき、市民を代表して感謝申し上げます。これからも両市の歴史的繋がりを再認識して、併せて経済的交流も進めて行ければと考えています。来月の9月22日と23日に450年記念式典を挙行し、ヴァリニャーノ神父の胸像の除幕式を行いますので、是非ご来市くださいますようご案内いたします。」とあった。その後、財団の会館の展示物を案内していただきました。キエーティ財団の前のオープンテラスでの会食には、多くの市民や今までで出会い触れ合った方々が大勢参加され、賑やかに楽しいひとときを過ごしました。



・ジュスティエーノ大聖堂

会食後、ホテルまで歩き、ホームステイ先の両親が運んできた旅行バックをバスに積み込む。別れの時間である。我々大人はバスにすんなり乗ったが、8ヶ所で抱き合い、お別れが長く続きました。昨日の昼に出会い次の昼の24時間だけど、また別れという辛さがありました。子供達同士やホストファミリーも加え、「涙・ナミダ・なみだ」のお別れで、その光景を



マッルチーノ劇場



ディ・ニシオ理事長



「涙・ナミダ・なみだ」お別れ



「涙・ナミダ・なみだ」お別れ



ワイン工場にて

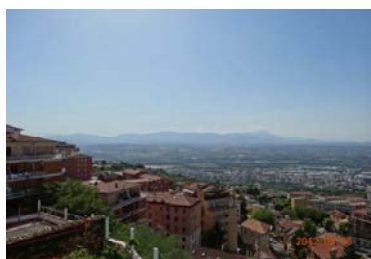


歓迎式典の出席者

見ていると、こみあげるて来るものがありました。こうまでもしていただけるのかと、市を上げての心温まる歓迎を受け、そして様々な人に出会い、長い歴史が生活の中と町並みに生きた町、「キエーティ」に、ありがとう。感謝したい。

ローマに向けてバスは、4時間あまり走る。今まで泣いていた少年少女は、後ろの座席で全員眠っている。ホテルについて夕食をすませて、後は明日の準備である。今夜は子どもたちをはじめ荷物整理が大変である。書籍やプレゼントなど各自の旅行バックには、はいらない量である。子どもたちは藤原市長からもらったカップめんを整理しながら食べてるらしい。フロントに行こうと歩いて行くと、二人の女の子がエレベータの横でうずくまっている。聞くと、携帯と電子辞書がないという。ホームステイ先よりお母さんにメールしたと言っているの、永友さんまで連れて行った。また、先日のホテルに洗顔セットのお気に入りのケースを忘れたとのことで、子供たちで電話したが言葉が通じなかったので、英語が堪能な高田副市長を捜していると、今度は廊下に残りの二人の女の子がにいたので、この子達も永友さんまで連れて行った。

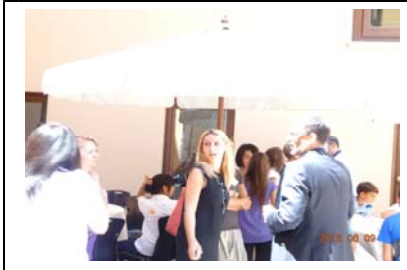
整理を終えてゆっくりとお風呂にはいっていると、ドアを強くたたくので、何かかと思つてバスタオルを腰に巻きビショビショで出て行くと、8名がドアの前に立っていた。私を見てハダカ・はだかと言つて騒いで困ってしまった。近所（隣室？）迷惑である。旅行バックをひっくり返したら、底にはいっていたとのことで安心した。風呂を終えてテーブルを見ると梅干しと塩豆と味噌汁が残っていたので前の部屋を叩いた。部屋中、荷物を広げて二人でじっと眺めて座っていた。食べなさいと梅干しと塩豆と味噌汁を置いて来た。寝ようとしていたら、ドアを叩くので出ると、二人の女の子は梅干しをほおぼつて、「明日は出発が早いので朝食はないから、今、食べたい」と、さっき渡した味噌汁の袋を手を持っている。1階のバーカウンターに行きお湯を貰うことにした。英語で言うが通じない。わからないのでボーイは同僚を呼んでくるが通じない。二人の女の子も加津佐と大分で「ホットウォーター」とだんだん声が大きくなるが通じなく成つて、しだいには「オーユー、オーユー」と言っている。それは日本語ではないか。もう一人は、水差しを触つて手を引っ込め、「アチチ、アチチ」として、ようやくお湯とカップを持ってきてくれた。気の毒なのでビールを貰うことにした。二人が食べ終わるまでには、2本飲んでいた。二人の後ろには食べ終わるまで優しく待っていて、「食べたら、朝が早いから早くお休みなさい」との声に振り向いた。事務局の永友さんだった。8名の少年少女をひとりで11日間お世話されてきている。まだ幼い少年少女で、初めての海外のうえ長期なので、いろんなことがあつた。二人が美味しい美味しいと言つてくれたので、嬉しく感じて、ローマ最後の夜はゆっくり眠れると思つた。



部屋からの風景



市長夫人・市会議員と



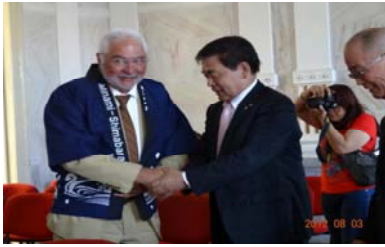
お別れ会の会食



別れ



市の中心部の広場



エヴォラにて

ローマを発つ日はホテルを4時半に出て、ローマのレオナルドダヴィンチ空港からパリのシャルルドゴール空港を経由して関西空港に着き、空港の広場で解散式を行ない、東京の二人と別れて長崎空港に飛んだ。

南島原市役所に着くと、みんなが「お疲れ様」の横断幕で迎えてくれました。アンナさんが寝言のように言っていた「カジハラサン」は、横断幕の片方を持っていました。



四宮全権大使

ポルトガルとイタリアとヴァチカン市国を訪問して、ポルトガルは、財政危機に陥ったのは、長いあいだ経済成長が低すぎたせいだといわれています。景気が低迷して税収が伸びないのに、公務員給与などの歳出はカットされなかったので、財政赤字だけが拡大しています。財政赤字削減を理由に日本の消費税にあたる付加価値税の税率引き上げを強行したポルトガルで、増税が消費を押し下げ、政府の思惑とは逆に税収が減る事態となっています。ガソリン代は1リットル1.680ユーロ。約165~175円で、日本より少し高いですが、平均所得が月額11万円です。日本の3分の1くらいです。在留邦人550人くらいときいた。日本人にも会わないし、近くの者でポルトガルを行った人をあまり聞かない。一般的に商品の種類や量が豊富ではないように感じました。デパートやショッピングセンターやアウトレットが出来たばかりらしいです。



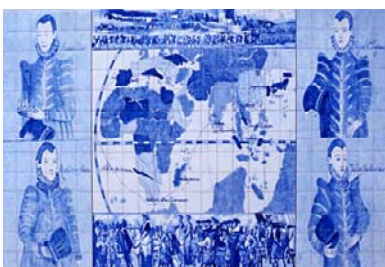
大使と市長の両夫人

人口も同じくらいのスウェーデンを訪問したとき、ホテル代とタクシー代が特に高いと思った。消費税は、25%で、食料品、ホテル代、交通費などは12%、書籍や新聞などと文化事業に関わる一部商品やサービスに対しては6%となっている。北欧よりホテル代などは安いようである。



エヴォラ市長と

先人が驚き感激したであろうこの地を430年後の今、辿るとき、ポルトガルと南島原市の各分野ごとの繋がりが出来ないかと日々考えた。先人が受けた恩恵と日本に持ち込まれた文化や食や各種の文明品などが日本にはいり、地域と共に進化して、今の日本の繁栄の礎と成っていると思います。何をこれから出来るかを模索することより始め、自我を超えた視点で歴史を見つめて行けば、必ず方向が見えて来るはずだと思います。そして方向がみえてくればおのずと方法が見つかるはずだ。私は、今回のこの成果を生かし、まずポルトガルより始め、そしてイタリアと推し進める作業をするべきと思います。三国間の特産品の相互の発掘と改良そして流通で経済的繋がりが出来ないだろうかと考えています。たとえば、ショップを福岡市や大阪や東京につくるより、ポルトガルのエヴォラ市やイタリアのキエーティに置いてもいいかと思っています。そこで各種のめんを食させ、めんヨーロッパの発信基地にしてはどうかと考えています。エヴォラでは小麦粉を麺にする文化がないと歓迎式典の場で市長に直接聞いてわかったからです。



天正の4少年

もう交流は始まっています。9月22日には、ポルトガル駐日大使のジ



8少年が行う
450年記念碑の除幕式



ヴァリニャーノ神父の除幕式
キエーティ財団の
ディ・ニシオ理事長の挨拶



8少年が帰ってきた
450年記念式典にて



大聖堂のヴァリニャーノ神父
胸像にて

ヨゼ・デ・フレイタス・フェラス氏とポルトガル全権大使の四宮氏、イタリアからは、キエーティ財団のディ・ニシオ理事長が出席されています。当日は、8少年も全国より全員集まり3国の国旗掲揚や除幕式を手伝っていました。

最後になりましたが、今回いろいろの体験をさせていただき、有意義の時間を持たせていただき感謝申し上げます。私は、天正4少年が立ち寄り地域の人たちと触れ合ったその場に立つと当時のことが目に浮かぶようです。若い少年たちが新しい文化を日本に持ち帰り伝えるため、命をかけて来たその信念は、我々も見習う必要があると思う。キリスト教ばかりではなく、人間として見聞きした知識を生かせる環境が当時の日本になかったことが残念ではあるが、ヴァリニャーノ神父がグウテンベルグ印刷機と活字を購入し随行及び同行者に技術を習得させ、日本に持ち込んだことも成果と言えます。そして長崎県が印刷業が何故か多いのに気づくはずです。

夢のような体験を通じ4少年の思いを重ねて少しでもこれからの地域社会に貢献できることを願いつつ紀行記を閉じたいと思います。

長い間お読みいただき深く感謝申し上げます。

また、世界の何処かをこれからもお伝えできる日を

楽しみにしております。

ありがとうございました。



ヴァリニャーノ神父の
胸像の製作者



ローマ時代の風呂が見つかった
エヴォラ市役所玄関にて



食べたら癖になる
タコとエビのリゾット



左がポルトガルの金平糖で小さいが
味に深みがある。右は日本のもの

■ 2012年8月8日（水）教皇ベネディクト十六世に謁見 ■



■ 2012年（平成24年）8月8日（水）午前10時30分から、カステル・ガンドルフォ教皇公邸前のピアッツァ・デッラ・リベルタ（自由広場）で、教皇ベネディクト十六世に謁見（322回）。この謁見の中で教皇は、司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）の創立者の、グスマンの聖ドミニクス（Dominicus 1170頃－1221年）の祈りの生活についてお話しされました。（原文はイタリア語です。）



親愛なる皆様

本日、教会は、司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）の創立者である、グスマンの聖ドミニクスを記念します。先の講話の中で、私は、すでにこの著名な人物と、彼が当時の教会の刷新に対してなした根本的な貢献についてお示しました。本日、私は聖ドミニクスの靈性の本質的な側面を強調したいと思います。すなわち、彼の祈りの生活です。聖ドミニクスは祈りの人でした。神に心を捕らえられた彼は、ただ、人々の靈魂、とくに当時の異端の網にかかった人々の靈魂の救いのみを望みました。聖ドミニクスはキリストに倣う人として、三つの福音的勧告（清貧・従順・貞潔）を徹底的に実践し、みことばの宣教と貧しい生活のあかしを結びつけました。彼は聖靈の導きのもとに、キリスト教的完徳の道を進みました。あらゆるときに、祈りは、彼の使徒的活動を刷新し、ますます実り豊かなものとする力となりました。

聖ドミニクスの後継者としてドミニコ会を導いた福者ザクセンのヨルダヌス（Jordanus de Saxonia; Jordan von Sachsen 1237年没）は、こう述べます。「昼間、彼よりも人付き合いのよい人はいなかった。……夜もまた、彼ほど熱心に目覚めて祈る人はいなかった。彼は昼を隣人にささげ、夜を神にささげたのだ」（P. Filippini, *San Domenico visto dai suoi contemporanei*, Bologna 1982, p. 133）。私達は、聖ドミニクスのうちに神の神秘の観想と使徒的活動の調和的な融合の模範を見いだすことができます。聖ドミニクスのそば近くにいた人の証言によれば、「彼はつねに神とともに、神について語りました」。この所見は、聖ドミニクスが主と深く一致していたこととともに、彼が他の人をこのような神との交わりへと導こうと努めたことを示します。聖ドミニクスは祈りに関する著作を残しませんでした。ドミニコ会の伝統は、『聖ドミニクスの祈りの九つの方法』という標題の書物のうちに、彼の生き生きとした体験をまとめ、伝えていきます。この書物は、あるドミニコ会士によって1260年から1288年の間に書かれました。それは、聖ドミニクスの内的生活の一側面を理解する助けとなるとともに、どれほど困難でも、いかに祈ればよいかをわたしたちが学ぶ上でのなごしの助けとなります。

それゆえ、聖ドミニクスによれば、祈りの九つの方法があります。これらの方法の一つひとつ（聖ドミニクスはそれをつねに十字架につけられたイエスのみ前で実践しました）は、身体と精神の態度を表します。この二つの態度は、密接に補い合いながら、精神の集中と熱意を深めます。最初の七つの方法は、神との一致、三位一体の神との一致を目指す歩みの段階として、上昇の道をたどります。聖ドミニクスは、へりくだりを表すために、立って頭を垂れて祈ります。自分の罪のゆるしを願うために地にひれ伏します。主の苦難にあずかるために、ひざまずいて悔い改めます。最高の愛を観想するために、手を広げ、十字架につけられたかたに目を注ぎます。天に目を向け、自分が神の世界に引き寄せられるのを感じながら。それゆえ、祈りの姿勢には三つあります。立つこと、ひざまずくこと、地にひれ伏すことです。しかし、いずれの場合にも、十字架につけられた主につねに目を注ぎます。しかし、私が、簡単に考察したい最後の二つの方法は、聖ドミニクスが通常実践していた二つの信心業に対応します。第一は個人としての黙

想です。黙想において、祈りはますます内的で、熱意に満ち、力を与えるものとなります。時課の典礼を唱え終わった後や、ミサをささげた後、聖ドミニクスは時間の制限を設けることなしに、神との対話を続けました。彼は落ち着いて座り、耳を傾ける態度をもって自分自身に精神を集中させ、書物を読んだり、十字架につけられた主に目を注ぎました。彼はこの神との関係の時を深く過ごしたので、場合により、外からも、彼が喜んだり涙を流したりする姿を見ることができました。それゆえ、黙想によって、彼は信仰の内容を内面化しました。目撃者が語るところによれば、彼はときには一種の脱魂に陥り、顔を輝かせました。しかし、天上から来る力に強められた彼は、その後すぐに、へりくだりのうちに日々の活動を再開しました。また、修道院から修道院へと旅する間にも彼は祈りました。彼は同行者とともに、朝の祈り、昼の祈り、晩の祈りを唱え、谷や丘を通るときは被造物の美しさを観想しました。そのようなときに、彼の心から神への賛美と感謝の歌が湧き起こりました。多くのたまもの、とくに、キリストがもたらしたあがないという、最大の奇跡のゆえにです。

親愛なる友人の皆様、聖ドミニクスは次のことを思い起こさせてくれます。すべてのキリスト信者が、家庭の中で、仕事や社会的活動を行うとき、また休暇の際にも、信仰のあかしの出発点としなければならないのは、祈りです。神に個人的に触れることです。この神との実際の関係だけが、すべての出来事、とくに苦しみの時を深く生き抜く力をわたしたちに与えるのです。聖ドミニクスは、わたしたちが祈るときに外的な姿勢の重要性をも思い起こさせてくれます。ひざまづくこと、主のみ前に立つこと、十字架につけられた主に目を注ぐこと、しばしの間、沈黙のうちに精神を集中させることは、二義的なことではありません。むしろそれは、わたしたちが全人格をもって内的に神との関係に入る助けとなります。私は、私達の霊的生活にとって、日々、静かな心で祈る時間を見いだすのが必要なことをあらためて強調したいと思います。わたしたちはとくに休暇の間、このような祈りの時をもたなければなりません。神と語るために少しの時間をとらなければなりません。それは私達の周りにいる人を神の現存の輝く光に導き入れる助けともなります。神こそが私達が必要とする平和と愛をもたらすかたです。ご清聴ありがとうございます。

■これまでの経緯

再度このような機会が、私の人生に再度巡ってこようとは思っていませんでした。口之津開港450年記念事業として「平成遣欧少年使節」名が南欧に派遣されることとなり、わたくしも同行させてもらうことにいたしました。14名（子供8名）で、他にテレビ局の撮影カメラマン1名が参加し、天正遣欧使節の足跡を辿るもので、ポルトガル、イタリア、バチカン市国を11日間かけての訪問です。

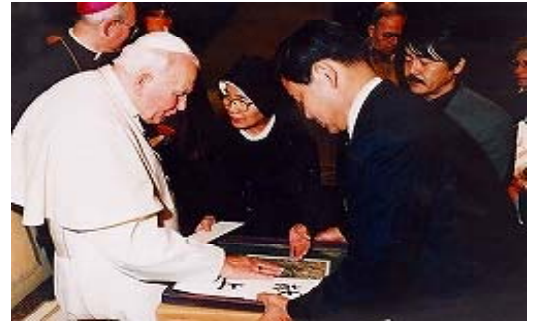
この訪問は、平成9年に遺跡文化事業街おこし推進事業の事務局及び推進委員（スペインとの交易担当）として、両国相互に交易担当者を常駐させる計画で、ジェットロなど廻わり事業を進めていました。同時期に銅版画が復元され、急遽ローマ法王に献上することとなりました。その銅版画は、慶長2年（1597年）有家のセミナリオで学んでいた日本人画学生によって制作されたもので、原図は、スペインのセビリヤ大聖堂内の15世紀末イタリア系後期ゴシック様式の壁画で、16世紀のオランダ人ヴィレックスが銅版画で写し、それがわが国に請来され本図の手本となった。銅版画「聖家族」（県指定有形文化財）と共に明治2年（1869年）、プティジャン神父がマニラで入手し、ローマ教皇ピウス8世に献上した。教皇は、日本におくべきものとして、プティジャン神父に返し、大浦天主堂に収蔵されたのち今日に至っている。

その模様は、1998年12月23日、バチカン市国はパウロ6世ホールにて、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の壇上に上り、持参した復刻銅版画を手渡した。法王は説明を聞き終えると、右手を版画の上へのせ、「ながさき ありがとう」とはっきりした日本で謝意を表された。

版画にとって、バチカンが父とすれば、セビリヤ大聖堂は生母である。版画が「セビリヤの聖母」と呼ばれる由来は、聖堂内に描かれた「アンティグア（古代）の聖母」という有名な壁画を模しているからである。コロンブスもその壁画の前に跪き祈って航海に出たという。因に、彼の墓はこの聖堂内に今も安置されている。壁画は、500年前に描かれたとは信じられぬ新鮮な光を今も放っている。マニラで発見したプティジャン司教によって献上され、日本にとって貴重なものとして長崎に返された経緯がある。

平成10年（1998）12月21日からの訪問でしたが、諸般の事情にて参加できなかった思い出があります。そこで、銅版画の復刻版と共に、監修製作した「ハイブリッド輪状二層めん」を献上することにしました。それは、桐箱、和紙、線香巻き、2本だけを白絹で丁寧に包み、そして桐箱を紫絹布で包み、5箱を作成して、1箱を手元に置き、4箱を送り出しました。ローマ法王に献上、スペインセビリヤ大聖

堂に献呈、セブリア市長に贈呈、セブリア商工会議所会頭に贈呈のためです。この輪状二層めんは、通常同一麺帯であるが、異質の麺帯の組み合わせであり、外が固く中心にゆくほどやわらかい「ふくよかな食感」を追求し、伝統的な製法に新たな技を加え完成させています。お湯の浸透早いので茹であ早く、煮くれ及び茹でのびし異質麺帯の最大利点を極限まで引き出した世界に例がない手延べ製法による特殊麺です。ラー王が機械の二層麺ですが、その以前に開発した画期的な特殊めんです。「幾多の迫害や重税に堪え忍び、農業の副業として携わってきた手延べそうめんも、地球上最大の産地を形成するに至りました。明日を夢見た先人、命を支え続けながら食文化の歴史を育み、そして味わいの中に幾世代の心を今に伝える島原手延べそうめんを、ここに献上いたします。」本文は桐箱の中蓋に刻印した原文です。



■プロフィール



木村優仁 (きむらまさひと)
(Kimura Masahito)

■【著者】木村優仁
 長崎県南島原市生まれ
 総務省 行政相談委員 (長崎行政相談委員協議会 役員)
 南島原市商工会 組織改革推進室 室長
 南島原くらしの総合行政相談所 所長
 南島原市個人情報保護審議会 委員長
 アンデス生物食文化研究所 主宰
 NOP法人障害者自立支援センター 相談役
 NOP法人障害者就労支援センター 顧問
 一般社団法人 しんらい長崎 理事
 インターナショナル・パブリック・オンブズマン
 所属学会 (国内) 日本オンブズマン学会 (学会) 同志社大法科大学院
 (国外) アジアオンブズマン協会 (学会) パキスタン
 (国外) 国際オンブズマン研究所 (学会) オーストリア



ローマ法王庁の避暑地
カステル・ガンドルフォ城
(Castel Gandolfo)

PC Mail arie@minamishimabara.com
 携帯 Mail international-ombudsman@softbank.ne.jp
 固定電話 0957-82-5923
 携帯電話 090-1362-0138
 PCサイト <http://www.minamishimabara.com>
 携帯サイト <http://www.minamishimabara.com/m/>
 ■ 2012年9月11日発行【南欧の風に吹かれて】
 発行者 木村優仁 発行所 アンデス生物食文化研究所
 〒859-2205 長崎県南島原市有家町小川長寿村1丁目1番地
 電話 0957-82-5923
 URL <http://www.andes-wind.com/sweden.html>
 URL <http://www.andes-wind.com/roma.pdf>
 印刷製本 NOP 法人障害者自立支援センター